

山辺赤人と東金

―伝承の発生と展開

岡田美也子

本日は「山辺赤人と東金―伝承の発生と展開」というテーマでお話をさせていただきます。資料は四枚用意いたしました。

初めに、山辺赤人に対する一般的な理解がどのようであるか、古典文学事典から抜粋したものを載せてあります。赤人については、生没年不詳で、出身地は特に書かれておりません。「部」の字を書く山部氏の出とするのが一般的です。聖武天皇の時代の万葉歌人であること。あとは、房総とのかかわりに関して有名なのは、市川の真間にいた手児奈の伝説を基に詠んだ歌がございまして、実際に房総を訪れたことのある歌人ということが共通理解になっているかと存じます。

一方、一般的な文学事典の採らない説として、赤人が上総国山辺郡、現在の成東・東金付近の出身だという説がございまして。現在、東金市田中に赤人塚が残っており、今回はそれに注目していきたいということで、資料には一貫して「辺」の字を使っております。

この赤人と東金との関係を検証した先行研究として、今回管見に入りましたのは、大きく分けて二つございまして。一つは、西山太郎氏の論文「山辺赤人と上総国、山辺郡」で、これは本日の話と同様、赤人上総出身説を和歌史の中で検証したものであります。



赤人塚 東金市田中

二つ目は、江畑耕作氏の御研究で、『房総の歌人 山辺赤人』、それを増補した『考証壬申の乱と山部赤人』という御著書があります。いずれも入手困難となっておりますが、私は前任校の図書館の集密書庫で偶然この図書を見つけまして、当時はまだ東金に赴任することは予想もしていなかったのですが、自分の専攻している古典と房総の関係は、こういうところにもあるのだなと関心を抱いた次第です。

江畑氏の御研究は、県内外の赤人に関する遺跡や古代遺跡を实地踏査され、また新しい資料も提出された、大変な力作です。木更津の小櫃に大友皇子を祭った白山神社があり、壬申の乱に負けた大友皇子が房総まで落ち延びて、そこで討たれて亡くなったという説がございます。その追討軍の中に赤人の父親安麻呂がいて、赤人は父親に同行して上総にやってくるに居着いたのだ、とお考えになっていきます。したがって、現在東金にある赤人塚は、本当のお墓であるというお考えです。

一方、私の立場は、事実か否かを論証するというよりも、文学的に赤人上総出身説がいつ頃から語られ、またその説を担ってきた人たちがどういう人たちであったかということを見ていくつもりでおります。

さて、おそらくこの会場には、東金市にお住まいで、あるいは実際にかと存じますが、確認のために資料の漢数字の「一」「東金と山辺赤人」という箇所をご覧ください。

東金市内の赤人のゆかりの遺品として有名なものに、赤人塚と赤人座像がございます。まず、資料に掲載した地図で場所を確認いたします。地図の左上に雄蛇ヶ池がございますが、そのやや斜め上の位置に法光寺とあります。こちらに赤人座像とされるものが納められているようで

す。それから、「雄蛇ヶ池」という字のすぐ右横に印をつけておきました。これが赤人塚の位置になります。

赤人塚には、碑が残っています。実地で確認いたしましたところ、文化二年（一八〇五）の建立ということを読めるのですが、碑を建てたと思われる人々の名前は読み取れない状態になっておりました。資料の□□□が判読不能箇所です。

また、山辺赤人の座像については、現在、法光寺の事情で実物を拝見することができませんでした。ただし、東金市や「ちばまるごと観光案内」というウェブサイトの写真が掲載されております。全体的に色は黒く、ややふっくらとした感じで、非常に穏やかな表情をした像です。東金市解説によれば、座高は十八・一センチ、文化年間の作とされていますが、写真を見ると比較的新しく見えます。

では、法光寺や赤人塚を訪れたときに撮影したビデオと、山辺赤人についての短い解説の映像を御覧いただきます。

（解説ビデオ視聴）省略

（実地踏査ビデオ視聴）省略

【岡田】 それでは、資料に戻っていただきます。

『東金市史』資料編によれば、法光寺には、享保十四年（一七二九）に書かれた「上総国山辺郡田中村赤人塚縁起」という資料が残されているようです。①です。この資料は大きく二つの部分に分けられます。前半は赤人とその像や塚の由来が記されています。後半は、それらの管理に関することです。もともと赤人像は、塚のところにあつたようですが、交通の妨げになっていたので、法光寺の鎮守の宮に移したということも書かれております。

注目したいのが、この四行目「飛鳥井家古今抄に云(フ)、上総国山辺郡人也」という記述です。赤人が上総国山辺の人であるということが飛鳥井家の「古今抄」に書かれているということです。また、法光寺から南へ二丁ほどのところ、田中の小高い丘が赤人の廟であるということも書かれています。今の位置関係とほぼ同じといってよいと思います。

続いて資料の下段「法光寺什宝産之縁起写」を御覧下さい。これは法光寺の開祖日行上人をめぐるお話で、いわゆる「産女」の話に似た筋のものです。日行上人が福俵の本福寺から法光寺に移動する途中に、子供を抱いた女性に出会います。申し訳ないがしばらくこの子供を抱いておいてほしいと言われて抱いたところ、石のように重くて、しかも冷たい。しかし、上人は、智行兼備の人であったので、経を唱えて産婦の苦を拭いて楽を与える祈願をした。すると、その女性は、上人の法力によって罪業が消滅し、重き苦を脱したと語り、そして、お礼として宝珠を上人に与え、忽然と消えた。不思議な力を持ったこの玉は法光寺の宝として収められている、といいます。赤人が登場しない縁起ですが、玉や龍神が登場する点で、後ほど御紹介する赤人伝説の一つと共通項を持っておりま

す。資料の二枚目に進みます。今度は、地誌の類から法光寺と山辺赤人に言及している部分を挙げておきました。②は、房総の史料として大変よく使われる資料で、宝暦十一年(一七六一)成立の中村国香『房総志料』です。「山辺赤人は上総国、山辺郡の人なり。かの地にささぐりとして、長さ一尺ばかりなるが、くりのなる」とあって、「古今榮雅抄に見えたり」とあります。これは、表記は異なりますが、『東金市史』所収の「赤人塚縁起」にも出てきた、「飛鳥井家古今抄」と同じである可能性が高

いと思います。したがって、赤人上総出身説において『古今抄』がひとつのポイントになってまいりますので、後ほど詳しくお話いたします。

さらに『房総志料』では、田中の地に赤人の塚があって、寛文の頃にその塚を開いたところ、朽ちた木像が一体見つかったといえます。これが実は赤人の像だったようなのですが、掘り出した土地の人たちはよく分からず、法興寺(法光寺カ)の奥の部屋に放っておき、しかも皆、閻魔の像とばかり思っていたというのです。その後、これをまねて像を彫った人物がいて、同じものが二つになっていたわけです。そして、元禄の頃に下総の佐倉(本文では「桜」と表記)から天台の僧侶が来て、閻魔像はこの宗派には必要ないと言って、一体持って帰ってしまった。実は、この持っていかれたほうが赤人の像であって、残ったほうは、新しくまねて作ったものであったのだなどと書かれています。

現在、法光寺には、赤人座像とともに閻魔像と称する木彫りの像も残されておりま

す。こちらのほうが古いようですが、赤人像との混乱は確かめようがありません。その赤人像については、③の『房総志料続編』のほうが若干詳しく書いてありまして、尺六、七寸で右手に筆を持っていて、古くも新しくもないとあります。そして、『房総志料続編』のほうでは、塚の存在も書かれておりま

す。次に、『東金市史』から引用しました、資料④『見聞記』をみたいと存じます。史料の性質を確認できませんでしたが、安政五年(一八五八)のものだとされています。

法光寺について一つ目の項目から確認できることは、長享元年の建立であること、「黒川美濃守の子兵部、後に彦三郎と称す」者の屋敷の土

地内にあったこと、それから、「酒井越中守清伝入道と号す」人物がこのあたりの領主であったことなどです。この「酒井越中守」とは、十五世紀末から土気・東金一帯を治めた、上総酒井氏の祖定隆と思われるかす。

次に、二、三番目の項目からわかることは、法光寺はもともと真言宗であったということです。さらに三つ目の項目は、もともと真言宗正源寺と称していたが、日行上人によって日蓮宗に改宗され、日泰上人開基とされたとあります。二つ目の項目には、西法寺という名称が見えており、⑤にあげました『上総国誌』には、これが法光寺の別称ということになっております。これらから、法光寺がいわゆる七里法華によって改宗されたお寺であるらしいということがわかります。

これらの史料をまとめてさらに詳しい情報載せる形で、明治十年に『上総国誌』が書かれました。この後ろから十行目くらいのところにも、やはり「黒川氏」の話題が出てきております。ここでは、この黒川の先祖は黒川弥次郎次綱といい、永禄年中（一五五八―一五七〇）に、田中刑部と称して会津にいたといえます。東金の田中という地名にちなんで称していたのでしょうか。この黒川氏の持っていた「古記」の中に、以下のようなことが書かれているといえます。柿本人麻呂と赤人が同一人物であること、石見国山野村に生まれ、持統・文武帝に石見守として仕えたこと、彼が罪を得て上総国の山辺郡田中村に流されたこと、聖武天皇時代に『万葉集』を選集する際に許されて、位階を改めて、山辺赤人と改名したことなどです。よって、赤人と人麻呂は同一人物であるということになるわけです。

この資料には、永徳二年（一三三二）、田中村西法寺という落款があつ

たということ、このまま信用できるならば、赤人の上総国山辺郡出身説の確認できる時期が大幅にさかのぼれることとなります。さらに、黒川氏所有の史料だということですので、これがどこからか発見されれば、上総国山辺郡の赤人伝承の解明に大きく寄与することでしょう。

さて、これらの資料を見えますと、赤人の上総国山辺郡出身説は、『古今集』序に関する注釈の中で伝えられてきたらしく、そうなるかどうかとも中世前期に伝承の発生が確認できるのではないかと。少なくともその頃に注目され始めたようだということが言えそうです。そこで、漢数字の三、『古今集』の古注釈の世界について確認していきたいと思えます。

皆さんご存じのとおり、『古今集』は最初の勅撰集ということ、後々歌人たちにとっては、必ず学ぶべきもの、いわゆる聖典として重んじられていきます。ただ、中には、時代経過に伴って解釈が困難になった箇所ですとか、理解の及ばない語句等が出てきて、さまざまに注釈が付けられていきます。そして、この古注釈の世界は、和歌という文学の世界だけではなくて、宗教的な世界ともかかわって、非常に奥深い世界を展開していきます。そしていわゆる説話という形で、和歌の説明にさまざまな物語が付されていきます。そのうちに、『古今集』の解釈については、古今伝授という形が確立され、師匠から弟子への秘説伝授によって伝えられていくこととなります。その古今伝授を確立したのが、下総を本拠地とした千葉氏の一族、東氏の常縁であります。

さて、『古今集』古注釈における赤人上総出身説は、仮名序の中のある一文をどう解釈するかということから始まっているようです。資料に仮名序を挙げておきましたが、ここでは、赤人が柿本人麻呂と並び称

されており。山への赤人といふ人ありけり。歌にあやく妙なりけり」とあつて、問題は両者の和歌の能力を比べた次の一文です。「人まろは赤人が上に立たむ事難く、赤人は人まろが下に立たむ事難くなむありける」。まず前半は、人麻呂は赤人の上ではない。つまり、人麻呂は赤人に対して、対等かそれより下だということになります。後半は、赤人は人麻呂の下ではないことですね。赤人は人麻呂の対等か上位である。このことから、赤人は人麻呂より上位、あるいは両者が対等であるということになります。

この一文はそれで理解ができる。しかし、仮名序にもありますように、柿本人麻呂は、歌の聖とまで言われた人であること、また、『古今集』所収歌の中には、「詠み人知らず」となっているが、実は人麻呂が詠んだ歌だという左注が付いている和歌がある。しかし、赤人の歌は採られていないという。つまり、人麻呂の歌は『古今集』に収められているようだが、赤人の歌は収められていない。そうすると、赤人のほうが人麻呂より優秀だと言いながら、赤人の歌は一首も入っていないのは妙である、しかも人麻呂は歌の聖だということで、「二人が同一人物である」といった一つの解釈が出てきたわけです。

ということで、赤人の伝説を考えていくときに、人麻呂に関する伝説も外すわけにはいかないのですが、今回は東金の話題ということで、人麻呂についてはあまり詳しく触れません。赤人と人麻呂、両方見ていく中で、また分かってくることもあるようにも思います。

それでは、赤人上総出身説について、古注釈の世界で言われていることをさらに確認していきたいと思います。

①に『古今和歌集序問書』という書物から引用しておきました。見出

しに「三流抄」と書きましたが、これはこの資料を紹介された片桐洋一先生が、他の系統と区別するためにつけられた総称です。古注釈の世界は本当に複雑でして、中身が同じであっても書物の名前が違ったり、あるいは同じような名前であってもよく読むと内容が違ったりということがあります。「三流抄」というのは、内容が類似した、ある一つの系統に対して付けられた仮の名称であります。これは、弘安九年（二二八六）かそれを大幅に下らない時期の成立であろうと言われております。

その一本、片桐先生所蔵の『古今和歌集序講義問答秘書』に、「山辺ノ赤人ト云人アリトハ、是ヲ或人ハ大和国山辺ニ住ケル人ト云。真ニハシカラズ。上総国山辺ノ郷ヨリ聖武ノ御時初テ上ル人也」と書いてあります。ここには山辺郡としか書いてございませんが、この書物の記事をそのまま信じるならば、東金成東付近を含む山辺郡出身という説が、少なくとも十三世紀末には存在したということになります。同じ系統の本で天理図書館所蔵『古今集序問答』では、さらに詳しい情報がありまして、藤原上総守真人という人に誘われて上総から上京した、と書かれております。

それから、②に挙げました『玉伝深秘卷』という書物ですけれども、これもまた成立時期というのにはつきりしません。今のところ、手がかりとされているのは、※印の三番目に挙げました冷泉為相の蔵書目録かと言われている資料です。この中に、「玉伝深秘」という書名が見えるので、この目録の成立に合わせて考えるのであれば、文保年間（二二七〇～二二九一）以前には少なくとも原型ができていたのではないかと考えております。

興味深いことに、この書物の中では、大変具体的な地名をあげながら、

一方で、荒唐無稽な赤人の伝説が収められております。荒唐無稽というのは、否定的な意味ではなくて、大変想像力に富んだということなのですが、この資料では、人麻呂の来歴に続きまして、赤人の来歴が二種類述べられています。

上段は、大和国山辺郡の出身という説ですけれども、この中にもいろいろと興味深い話がありまして、赤人はもともと人間ではなかったという語り口になっております。二行目、顔や体が少し赤く、三十歳ぐらいの人間が、大和国の忍常の嶽というところに忽然と現れた。周りの者は天狗か鬼か魔王かといって大変恐れしたが、顔や体が赤いことによつて、赤人と名付けられたということ。このまま放置しておくわけにはいかないうことで、天武の帝に奏上し、命によつて都に上つたというのです。そして、赤人の語つたところとして、人麻呂とは兄弟で、かつては二人とも「漢土」すなわち中国にいて、「左右の大臣」に就いていた、と述べられています。

同じ『玉伝深秘巻』には異説として、上総国山辺郡説も収められております。真ん中の段に掲載したもので、大変具体的な地名が出てきております。例えば一行目、上総国山辺郡の「ふこうい（本文「不幸井」）」と読むのでしょうか。地名辞典等で調べてみましたが見当たりませんでしたので、ご存じの方がいらっしゃいましたら、ぜひ教えていただきたいと存じます。文武天皇の御世、山辺郡不幸井の観音堂に老翁が一人忽然と現れた。後で判明するのですが、この翁は後に赤人と名づけられ、彼の二人の子どものうちの一人が人麻呂であるというように、ここでは親子説になっております。

資料の六行目、赤人はもともと大唐の者で詩賦をもてあそび暮らして

いたところ、妬まれて、夫婦二人うつほ船に入れられて海に捨てられた。しかし、龍神に養われつつ流れていくうちに、下総国「かちとが崎」に打ち上げられたとあります。この地名も不明です。現在の「香取」は「梶取」と書くこともありましたが、もしかやと思つたりもします。

下総国に流れ着いた後、山辺郡に行き、不幸井の観音堂の仏を奉つて暮らしていたところ、観音から白い玉を二ついただいた夢を見た。そして、二人の男の子を授かつて、兄を「珍玉」、弟を「相玉」と名付けた。ところが、赤人夫妻が唐から日本に流れ着くときに、龍神に助けられたせいでしょう、龍神が海からやってきて、一人子どもをくれと言つてきた。相玉をあげてしまつて、珍玉だけを育てていたのですが、これも七歳のときに行方不明になつてしまつて、悲しんだ妻も死んでしまふ。そうしているうちに、石見国にまた不思議な人が忽然と現れた。この「化人」は和歌の道に優れ、帝に召され仕えていたが、これが実は珍玉、すなわち人麻呂だつたということになっております。人麻呂が石見国で亡くなつたという説なども関連しているといえるでしょう。そして、珍玉すなわち人丸と親子の対面を果たした翁は、帝から名を尋ねられて、もともと名前はなく、住んでいたところに因んで「不幸井の太夫」、あるいはいなくなつた子供を偲んで泣き暮らしていたので、「涙太夫」と称していたと答えます。そこで、翁の生国が上総国山辺郡なので山辺という姓、顔が赤いので赤人、と名を賜つたと書いてあります。

『古今集』仮名序は、人麻呂は赤人の上に立つことができなうと言つていましたが、この伝説ではその理由を、赤人は人麻呂の父親だから上に置かれる、と親子関係によるものと説明しております。

①で御紹介した「三流抄」系統の古注釈と、この『玉伝深秘巻』との

間には、かなり違いがありますが、③にあげた『古今和歌集灌頂口伝』には、また異説が見えます。複雑にからみながら、徐々に赤人の話が膨らんでいく様子が見えてくるかと存じます。『古今和歌集灌頂口伝』では、人麻呂が天皇の后を犯した罪で上総国に配流されたが、『万葉集』編纂に際して召し返して判者にすべきであるということになり、姓を山辺、名を赤人として召し返したという伝説が語られています。これは『上総国誌』にみえた黒川氏所有の「古記」と相通するもので、注目したいと思います。

この古注釈の書は、複数の写本が残っておりますが、初雁文庫旧蔵の一本によれば「正安二年二月十八日 前大納言為世在判」と記されておられ、二条家流のものと考えられております。年記を鵜呑みにすることはできませんが、正安二年は一三〇一年になります。

最後に、④として、地誌や東金ゆかりの史料に触れられていた「飛鳥井家古今抄」あるいは「古今榮雅抄」と思われる注釈書から該当部分を挙げておきました。

引用部分のちょうど真ん中辺りですが、「上総国山辺郡の人なり。彼所に廟、今にあり、旅客歌をかき付ると也。彼所にさ、栗とて、長一尺ばかりあるに、栗のなると、かの国の住人物語あれば、今書きつくるところなり」とあります。初めて廟の存在が語られていること、しかも、そのことが現地に住んでいる人からもたらされた情報として記されているということが注目されます。

この注釈書は、榮雅つまり飛鳥井雅親が講釈の際に用いた本を基にしつつ、その息子の雅俊の説を加え、さらにその弟子速水親祐の伝授を受けた玉信という人物がまとめたものとされております。この玉信につい

ては素性が全く分かっておりません。永祿四年（一五六二）二月十八日書写と奥書にあります。関係者の生没年より、内容的には、大体十五世紀後半から十六世紀半ばにかけて記録されていたものと考えられるかと存じます。

これらの古注釈をみてきますと、少なくとも十四～十五世紀頃には、『古今集』古注釈の一部で、赤人の上総国山辺郡出身説は広がりつつあったと言えるようです。今回取り上げた資料の成立年代や素性をすべて確定するのは大変困難なことです。仮に先行研究による推定成立年代が全て正しいという前提で考えますと、①②③と④の間に、『上総国誌』が引用していた資料、「永徳二年壬戌七月日 田中村西法寺」と奥書がある、黒川氏所有の「古記」が入ってくるという順序になります。

また、これまで御紹介した古注釈の資料の中には、まだ現在の赤人塚の位置、つまり東金市田中に相当する具体的な地名を見出すことはできません。ただ、黒川氏所有の「古記」と『古今榮雅抄』を合わせ考えるならば、『榮雅抄』の述べる「彼所」が田中である可能性は高いといえるでしょう。

これらのことから、安川柳溪が閲覧した黒川氏所有の「古記」が、現在の東金市田中の赤人塚に関する非常に重要な資料になってくるということを示唆したいと存じます。また、黒川氏「古記」が、『古今和歌集灌頂口伝』に類する書物を土台として成立した可能性があるということです。残念ながら、今回はこれらの点に調査が及びませんでしたので、今後、継続して考えていきたいと存じます。

さて、資料四枚目の漢数字四の箇所を御覧下さい。これら古注釈の継

承者と上総国山辺郡を結び付けるものについて探っていきたいと思うのですが、どの時代に照準をあてるかによって関係を示唆する材料が異なっておりまゝです。ここでは、先ほどの古注釈の①②③の伝授の中で重要人物となる藤原為顕と、それから為相の周辺を例として挙げておきました。この歌人たちはいずれも定家の子である為家の息子、すなわち定家の孫にあたります。また、いずれも関東に歌壇を形成しました。

定家の子供である為家は京で活躍をしていたわけですが、その子どもに代に冷泉、二条、京極という三つの家に分かれて、家の相続や歌壇での主導権での争いを始めます。そして、為相や為顕らは、関東のほうにむしろ活躍の機会を求めてやっています。為顕の場合は、弘安元年（二二七八）以前より関東に住んでいたことが分かるとされています。最初に挙げた『古今和歌集序開書』、①の古注釈が弘安九年かそれを大幅にくだらない時期の成立とされておりますから、それより前に為顕は関東に来ていたということになります。

その為顕から何種類かの『古今集』の古注釈を受け継いでいる人物として、能基（のうき）という僧侶のいることがわかっております。この人物は、系図の中には確認できませんが、朝基（とももとカ）の子と書いてある資料がありまして、どうも下野国、今の栃木県に本拠地を築いて宇都宮歌壇を形成した宇都宮氏の出身のようです。この家系には、為家の妻になった女性もいまして、二条為氏と為教を生んでいます。『古今和歌集灌頂口伝』相承の系譜に為世の名が見えますが、彼は為氏の子ともありません。

一方、冷泉為相は為氏と相続問題で争ったわけですが、その関係で弘安、正応の頃から、鎌倉と京を行ったり来たり来たりして、鎌倉歌壇の指

導も行ないました。為相の墓は鎌倉の浄光明寺にあります。浄光明寺は、北条長時が再興した寺でその寺領が上総国の山辺郡にあったようです。長時が東金に住んだかどうかは不明ですが、松之郷に久我城を建てております。

決定的なものは何もないのですけれども、この他にも関係を示す材料は複数あります。上総国山辺郡が歌壇の動きと何らか連動する環境にあったということが言えると思います。

さて、最後は、ここまでの話と離れますが、山口志道と赤人について少しお話をさせていただきます。

ここまで、赤人と上総国山辺郡とのつながりは、『古今集』、特に仮名序の注釈史の中で伝えられてきたのではないかと考えてきました。おそらくそれらを受けてと思われるが、近世になりますと、赤人の和歌の中でも有名な「田子の浦ゆうち出でてみれば真白にぞ富士の高嶺に雪は降りける」の注釈において、やはり赤人上総国出身説に触れるものが出てまいります。資料には『万葉集』から引用しましたけれども、御承知のとおり『百人一首』に採られていて、主に『百人一首』の注釈において、そのことが言われております。

そのうち今回は山口志道のみをとりあげたいと存じます。その理由は今回の講演の主旨に書きましたように、偶然ですが、志道出身地と彼の理解した赤人関係地の三つが、ちょうどそれぞれに本学の拠点ともなっているからです。本学は今度鴨川にキャンパスを建設いたしました。志道は長狭郡吉尾村、現在の鴨川市の出身です。そして、志道は、赤人の詠んだ「田子の浦」が、通常言われているように駿河国の地名ではなくて、鋸南町の勝山一帯のことであると述べました。鋸南町は本学の施

設セミナーハウスがある場所です。

志道は、国学者で、神代学という言葉霊を重視した神道の一つの学問体系を築いた人ですので、そういう意味では古注釈の影響はいろいろ受けているのではないかと思われるのですが、資料に挙げました『百首正解』を見る限り、あまり直接的な影響はないように思います。自分自身が勝山の風景から見たときに、光の当たり具合などを非常に事細かに検証して、駿河よりもこちらのほうが赤人の詠んだ風景に合っていると述べております。そのなかで、賀茂真淵の名前は出てくるものの、他の古注釈とあまり連動していないようです。ただ、直接的でないにしても、志道説の背景もまた興味深いものがあります。

『百人一首』の注釈書の中に、田子の浦の所在地を上総としているものは、見当たりませんでした。一方で、今回御紹介した『古今集』の注釈の関係、特に為顕流と言われるものの中に、「柿本人磨之事」と題して柿本人麻呂の伝記を取り出したものがございます。その奥書が下段に引用したのですが、二行目のところに、ある人が言ったこととして、『万葉集』に赤人が富士山を詠んだ歌があるが、これは東国に来た者でなければ詠めないだろう、人磨が名前を変えて上総国から都に戻る時に詠んだものか、と書いてあります。このあたりに、赤人の上総出身説と富士の歌を結びつける意識が見えるように思います。

さて、かなり多くの資料を提示いたしましたので、逆に今後の課題は増えています。時間も参りましたのでまとめをさせていただきます。十三世紀後半から十四世紀前半、為家の子どもの代、為顕や為相の関東下向による上総国山辺郡の「再発見」というべき事柄があったかもしれない。単にこの地を改めて認識したというだけではなく「ここに

も山辺郡がある、ここは赤人の出身地ではないか」という発想が生じたのではないかと想像するのです。そして、黒川氏の「古記」から『古今栄雅抄』成立の間くらい、つまり十四世紀半ばから十六世紀前半くらいの方に、何者か上総国山辺郡に赤人の跡を留めようと廟を作ったのではないかということ仮説として考えております。

その背景としては、関東歌壇の、京都歌壇への対抗意識ということもあるかもしれません。人麻呂と赤人は、並び称されながら、人麻呂の神格化がかなり早くから明確な形でなされる一方で、赤人はそれと対応するほどの扱いがありませんでした。よって、関東に下った為顕や為相が、関東出身の天才歌人として赤人を担ぎ出した可能性も考えられるかと思っております。ただし、京都勢が著した古注釈に上総国出身説が全く出てこないかという点、そうでもないようですので、慎重な検討が必要ですよ。

また、古注釈の世界は秘説とされる事柄も多いので、あえて文字にしないということもございます。書いていないからといって、その著者が知らなかった、あるいはその説を採用しなかったということでもない。厳密に言えば、明らかに大和国山辺郡の出身だと書いてあつてはじめて上総国出身説ではないということが言えるわけです。

さて、今後の課題について。まず、『古今集』古注釈の資料と現地資料との接点となる、黒川氏とその所有の「古記」についての調査が必要です。また、やはり現地資料や地誌に名前が見えた酒井越中守定隆、その父で東金城と土気城の城主となつたとされる浜春利（治敏）やその周辺も、古今伝授の東常縁との関係などから見逃せない人物です。

また、『玉伝深秘巻』「赤人縁起」や「法光寺什宝産之珠縁起」などに

みえる、玉や龍のモチーフも興味深いものがあります。江畑耕作氏が御著書で紹介されている、成東の珍宝山真行寺（廃寺）の資料にもこれらのモチーフは共通しております。

また、法光寺について日蓮宗に改宗する以前は真言宗であったと申し上げました。為顕流の『古今集』注を筆写した能基という人物は、伊豆山の密厳院別当覚玄という人に弟子として付いていたようです。この伊豆山の密厳院は、源頼朝の伊豆山の逃亡説話を広めたことが知られております。ここには真言を中心として、天台の教理も入ってきていて、関東のおける一種の説話造成基地のような役割を果たしていたようです。このあたりの活動と上総国山辺郡とがどう関係してくるのか。

そして、下総・上総地域を中心とする中世の歌人たちの活動については、既に多くの方が論じられてきているところではありますが、それらと赤人伝説がどのように繋がってくるのか。例えば、私も、平成十年に開催された「文学史と房総Ⅰ」で「物語伝承圏と佐倉―『雲玉和歌集』を読む―」と題して話をさせていただきましたが、『雲玉和歌集』という私家集が永正十一年（一五一四）に佐倉で編まれております。さらに、これと強い関係を持つ『塵荊抄』という説話集があつて、この書物が今日ご紹介した『玉伝深秘巻』と大変強い関係にあります。一般にはあまり知られていない作品ですが、関東において編まれたこれらの説話集や歌集の成立を解明する手がかりが得られればと考えております。

以上、東金の赤人伝説については、まだまだ面白そうな材料がたくさんございますが、今回は、掘り出しただけに終わってしまいました。大変申し訳ございませんが、以上で今回のお話を終わらせていただきます。ありがとうございます。

※講演終了後、外山信司氏より日泰上人の名が『雲玉和歌抄』に見えることを御指摘いただいた。日泰は、日蓮宗妙満寺派の僧で、武蔵国品川の妙蓮寺を拠点に伊豆や相模に活動した。その後、下総国浜村に本行寺を建立、布教の拠点とした。品川との行き来の船に乗り合せた酒井定隆がその教えに感激し、東金・土気城主となった晩に、浜村と片貝村一帯を日蓮宗に改宗させた（七里法華）。法光寺はその一つである。

※同じく、飯高和夫氏からは法光寺蔵「慶安二年新寺検地帳」（原本焼失）の複写を御恵贈いただいた。ここに田中村の黒川氏の名が見える。稿者自身、後日気付いたことであるが、日蓮宗妙満寺派の開祖日什は会津黒川の出である。それと何らかの関係がある氏であろうか。

※以上、細部については再考し、稿を改めたい。

（おかだ みやこ・本学人文学部国際文化学科助教授）